

チョークアーティスト

笹森

花絵さん(29)

札幌在住のチョークアーティスト笹森花絵さんの作品展が31日まで、製鉄記念室蘭病院(室蘭市知利別町)の「せいてつギャラリー」で開かれている。病气やけがをした人を治療する病院に、芸術を取り入れるホスピタル・アート(病院アート)に初挑戦した笹森さんに、チョークアートの魅力や作品の狙いを聞いた。

(岩崎志帆)

「チョークアートについて、黒板で描くというイメージを教えてください。」

「専用のチョークを使って、黒板にイラストやレタリングを描く手法です。チョークならではの明るい色彩が特長で、飲食店の看板や結婚式の入り口の看板などでよく見かけます。最近では家のインテリアとしても飾られるようになりました。道具は誰しもが学校で触れたことのあるチョークと黒板です。」

「誰でも挑戦できると思うのですが、アートは日常的で身近な存在であるべきだと思います。芸術だと身構える必要はありません。私が目指すのは『カフェ看板から広がるアート生活』。今は札幌を中心に、飲食店の看板や表札などを手掛けています。札幌や登別で初心者を対象としたチョークアートの教室も開いています。」

土曜とーく

患者癒やす身近な芸術



せいてつギャラリーの作品の前でチョークアートの魅力を語る笹森さん

ささもり・はなえ 86年、後志管内余市町生まれ。札幌大谷短大保育科(当時)を卒業。生花店などでの勤務を経て、13年にアーティストとして独立。札幌で活動する画家の伊藤マーティンさんに師事。

「今回の作品展は、黒板から病院の壁面に『キャンパス』が広がりました。」

「こんなに広く、真っ白な壁に絵を描いたのは初めてです。このギャラリーは患者さんのほかに、その家族や病院の関係者、お見舞いに来る人など多くの人たちが訪れます。チョークアートならではの分かりやすい表現を心掛けた。風船やリボンのふわふわした絵柄や、ウサギやリスを明るいタッチで描きました。女の子を中心に配置した七つの黒板とともに、全体としてひとつの世界をつくりました。」

「作品に見入っている患者さんがいました。」

「この作品では自分が描きたい絵というよりも、人とのつながりの大切さを表現しました。作品を鑑賞していただいたみなさんに、ほっこりした気分になってもらえれば成功だと思います。」

「今後の活動の抱負を教えてください。」

「今回の作品展は私自身にとってもいい経験になりました。活動の幅をもっと広げたいと思います。チョークアートには学問で取り上げる芸術とは違った親しみやすさがあります。少しでも多くの人にこのアートの魅力を伝えたいですね。」